

2 朝日普談寺觀音堂の文祿五年銘鰐口

はじめに

ここで報告する鰐口は、平成30年度文化財センター企画展2「新潟の鎌物師－近世新潟町の職人－」に先立ち、『日本の梵鐘』〔坪井1970〕に記載のある普談寺の鰐口の所在調査をした際に再発見したものである。

『中蒲原郡誌 上編』〔新潟県中蒲原郡1918〕に掲載された鰐口が『大悲山殿堂寺往昔之記』の引用ではなく、現存することを確認できた意義は大きいと考え、資料報告を行うこととした。

発見の経緯

普談寺は新潟市秋葉区朝日に所在し、真言宗智山派に属している。また越後三十三觀音靈場の第三十番札所として、觀音堂のご本尊十一面觀世音菩薩は朝日の觀音様として信仰の対象となっている。

平成30年5月23日に觀音堂に鰐口が懸けられているのを発見し、何らかの銘があることを確認したが、銘文のある面が表側であったために建物の幕板に隠れて銘文を全ては読むことができなかった。その後、6月20日にご住職の小林一三氏の立会いのもと、鰐口を取り外させていただき、文祿五年銘のある鰐口であることを確認することができた。この鰐口は、企画展の会期中お借りして展示を行った。

鰐口

これまでこの鰐口について、文献等で記されている主なものを紹介する。

・貞享4（1687）年の『大悲山殿堂寺往昔之記』に
「一頃野火余り殿堂記録或宝物等不残焼失」
「一、堂前鰐口陶冶之儀会津若松遠藤甚四郎、暦号者
文祿五年、即当貞享四丁卯九十二年ニ御座候」とあり、
「一、後堂建立棟札之写ニ云

源新津丹波守 勝資

源新津内記進 秀祐

千坂対馬守 賴儀

旭村普陀路山普談寺尖雄

暦者文祿年中、裏書之写ニ云」と棟札の写しを伝える
〔新津市史 資料編第3巻 近世2〕〔1990〕。

『大悲山殿堂寺往昔之記』には棟札の年号の記載はないが、『新津市史』が引用する福王寺所蔵の文書には「文祿二年癸巳」と書かれているという（『新津市史 資料編第1巻 原始・古代・中世』〔1989〕）。

・大正17（1918）年の『中蒲原郡誌 上編』「卷十五 金津村誌」に普談寺宝物の一つとして「鰐口一個（方一尺五分文祿五年丙申、朝日村普陀洛山普談寺大工會津若松遠藤甚

四郎の銘あり）」と記載されている。

県内の鰐口の金文は『新潟県史 資料編5 中世3 文書編Ⅲ』〔1984〕に集成されているが、この鰐口は未掲載で、『新津市史 資料編第1巻 原始・古代・中世』〔1989〕にも未掲載であり、調査対象から漏れていたと思われる。

第2次世界大戦時の金属類の供出前に梵鐘や鰐口などをまとめた『新潟県史蹟名勝天然紀念物第12輯』〔斎藤1944〕でも「普談寺 鰐口 不明」と記載されていることから、この頃すでに所在が分からなかったのかもしれない。『日本の梵鐘』〔坪井1970〕の中世金工品一覧に「會津大工遠藤甚四郎」と記載があるのは、上記『中蒲原郡誌 上編』〔1918〕に拠ったものであろう。

鰐口の調査所見

銅製で部分的に地金の色が見えるが、全体に薄く青銅色を呈している。大きさは、最大幅35.3cm、鼓面径29.3cm、鼓厚12.4cm、肩厚7.5cm。重さは約8.2kg。

鼓面は撞座を中心に4重の圈線で区画されるが、圈線は最も内側と外側は2条の複圈となっている。圈線はいずれも断面蒲鉾形であることから、挽型で鋳型が作られたと推察される。撞座は陽鋳で、三角形の小蓮弁8枚で囲まれた中に9個の蓮子とその外側の30数本の放射状の蕊が配されている。後述するように最外区には中央から左右に逆時計回り、時計回りに銘が陰刻される。吊環（耳）は不整形で大きくはなく、円筒形の目は比較的長く、断面形は小判形を呈する。また、左右の目から縁沿いに開いた口唇の幅は1.9cm程である。

鼓面を観察すると、最外区には6mm四方程の型持が5か所認められ、赤鋳びが付着していることから、鉄製の型持と考えられる。5個ある型持のうち4個は銘文を避けているように見える。裏面の型持は4個確認できる。鋳揚がりは良好で鋳掛の跡は認められない。鼓上部、耳周辺にはヘラ状のナデ跡が認められる。

銘文

外区左 「旭村普談寺 普墮樂山」

外区右 「文祿五年丙申 何月何日 大工 會津
若松 遠藤甚四良」

「旭村普談寺」は 鰐口が伝わる同寺のこと。「普墮樂」（補陀樂 ふだらく）は、觀音菩薩の降臨する靈場の事でかつては觀音堂のある普談寺らしい山号だったが、延宝4（1676）年に「大悲山」に改められたので〔新津市役所1979〕、それ以前の山号ということになる。

「文祿五年」は同年10月に慶長と改元されるので、改元前の年（1596）になる。右から左に書かれる干支（丙申）も矛盾はない。「何月何日」は自分が作ったものにこの

ように書くものだろうか。妙案はない。奉納する日付を入れるつもりだったものを何らかの理由でそのまま鋳込んだのだろうか。

「大工 会津 若松 遠藤甚四良」は鋳物師名で、「大工」は鋳物師大工のこと。会津周辺の鋳物師に早川姓・長谷川姓はあるが、遠藤姓は見当たらない。「会津 若松」は、「会津」と「若松」の間が空いていることから会津若松としての通称として用いられたのではないと考える。「会津」は『福島県史第7巻 資料編2 古代・中世資料』〔福島県1966〕によれば、同時期の資料で「(奥州)会津」などとして散見される。また、「若松」の使用は、天正18(1590)年に蒲生氏郷が伊勢から会津に移封されたことに由来すると言われているから、文禄5(1596)年銘の矛盾はないと言える。亡失資料ではあるが福島県史に掲載されている南会津郡田島町愛宕神社鰐口銘の「慶長十八年五月吉日 大工若松住 長谷川清六」(資料776)の慶長18(1613)年が近い年代と言えよう。

仮に「会津若松」とした場合、恵日寺旧蔵の室町時代の作品と考えられる十二天図の軸木には修復の墨書銘があり、第2期の延宝3(1675)年に「奥州会津若松赤井町」などの表記が見られ〔阿部2005〕、17世紀後半頃からの通称と考えられるが(※1)、本例はそれよりも80年以上古い会津若松の使用例ということになろう。

なお、奉納者、願主の名前が書かれていないが大工自身が奉納したと鰐口と考えられる。

写しではあるが観音堂の再建時の棟札に文禄二癸巳年の記載があるので、観音堂再建後に寄進された鰐口ということになろう。新津勝資とともに観音堂を再建した新津秀祐は勝資の実子でなく、会津を治めていた葦名家旧臣の赤津弾正の次男であり(「新津系図」『新津市史 資料編第1巻 原始・古代・中世』〔1989〕)、主家没落後越後に逃れて来たと考えられるから、このあたりに会津と普談寺の関係があったのかもしれない(※2)。



朝日普談寺観音堂鰐口

おわりに

『中蒲原郡誌 上編』〔1918〕に掲載された鰐口を約100年ぶりに再発見した。鰐口に陰刻された銘文に意味の不明瞭な箇所があるが、鰐口そのものは文禄年間頃のもので問題はないとい、鰐口を精力的に研究されている愛甲昇寛氏に確認していただいた。

今後は、現在の観音堂が文禄二年に再建された建物かなど、別の視点からも調査を行う必要がある。

末筆ではありますが、資料紹介をお許し下さった普談寺住職小林一三氏、会津若松の地名の由来などについて高橋充氏、鰐口のことについて愛甲昇寛氏・五十川伸矢氏、金文について伊東祐之氏、郷土史全般について木村宗文氏・今野誠氏にお世話になりました。お名前を記して感謝いたします。

(渡邊朋和)

※1 福島県立博物館高橋充氏教示。

※2 今野誠氏教示。

引用・参考文献

愛甲昇寛 2005「鰐口にみる銘文の表現」『真鍋俊照博士還暦記念論集 仏教美術と歴史文化』

愛甲昇寛 2007『改訂増補 慶長以前鰐口・雲版年表稿 付鰐口鋳物師一覧 朝鮮金鼓』真言史学会

阿部綾子 2005「研究ノート 軸木墨書にみる「十二天図」の修復過程」『季刊博物館だより』79 福島県立博物館

齋藤秀平 1944『新潟県史蹟名勝天然紀念物第12輯』新潟県

高橋充 2004「3 南奥の鋳物師」『陸奥国の戦国社会 奥羽史研究叢書6』

坪井良平 1970『日本の梵鐘』 角川書店

新潟県 1984『新潟県史 資料編5 中世3 文書編Ⅲ』

新潟県中蒲原郡 1918『中蒲原郡誌 上編』

新津市 1989『新津市史 資料編第1巻 原始・古代・中世』

新津市 1990『新津市史 資料編第3巻 近世2』

新津市 1991『新津市史 資料編6 民俗・文化財』

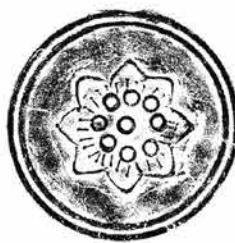
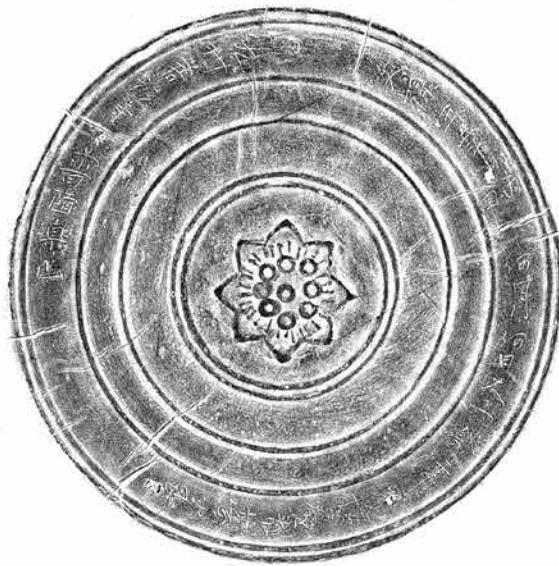
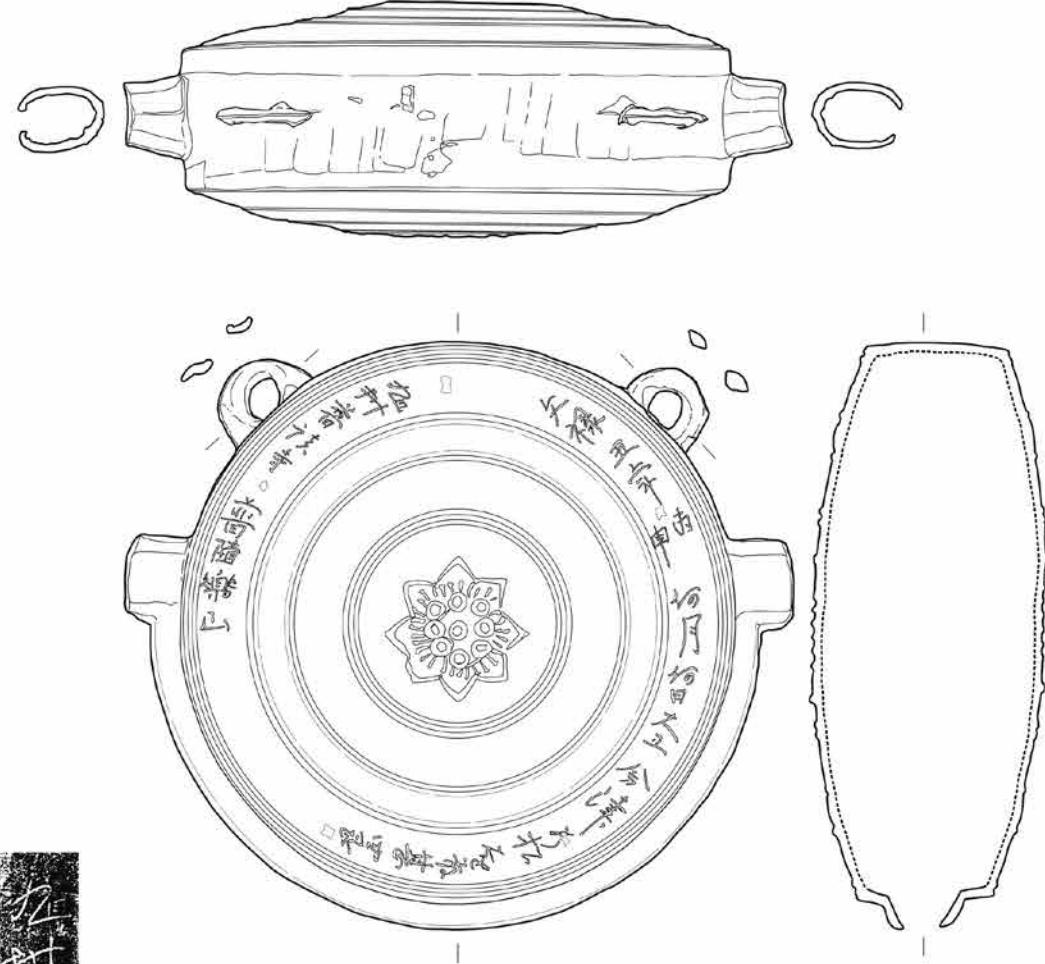
新潟市役所 1979『新津市史 金津・小合・新潟地区編』

林佐平 1967「二 早川家の伝承と鋳物師の支配」『会津若松市史 第11巻 文化編』

福島県 1966『福島県史 第7巻 資料編2 古代・中世資料』

渡邊明 2010『会津の鋳物師』『会津若松市史研究』第11号 会津若松市





0 (1:4) 15cm

朝日普談寺觀音堂鰐口